

希求の助詞「こそ」の攷

朝山信彌

て、以下この小論の序に代へる事を許していただきたい。

所謂希求の終助詞「こそ」について、その發生的な意義を明らかにしようとする事が、私のこの小論の任務なのである。

古くは江戸期の篤學鹿持雅澄や林閉雄の説に始まり、近くは故松岡靜雄、徳田淨氏等の高説に至るまで、この語の研究の歴史は長いのであるが、今はそれらの學説について一一述べて居るだけの餘裕はない。唯此處では、現在殆ど定説となつて居り、山田孝雄博士以下多くの學者によつて支持されて來た係助詞同語説に対する若干の立言に限つ

單に係詞的用法から終置せられたと言ふ理由だけで希求の意味を表はずとは考へ難い事である。尤もこれはすでに山田博士に御説があるが、^(註一)論は論として、他の係助詞にはかかる實例が見あたらない様であり、更に博士の御説によるとしても、終置せられた「こそ」が願望でなくて殊に希求であると言ふ事の理由はまだ明らかでないと思はれる。

次に所謂希求の「こそ」は必ず動詞—稀にそれに準する助

動詞一に後續すると言ふ事も不審である。係詞の「こそ」は用言體言の種々の語に後續するからであつて、これが終置されるに及んで單に動詞にのみ後續すると言ふ事は、それ相當の説明のない限りやはり我々には疑問なのである。此處にかの活動的属性を持つ動詞以外は命令希求の對象になり得ないと言ふ考を援用すれば、一應は解決するが、この時には、「一方に於てすでに」「こそ」のあらはす希求の意味は係詞の終置的用法から一次的に分化したものでなくして、發生的終置の「こそ」は簡略的属性の語に纏き得ない希求言であつた事を認めなければならぬ。

以上は紙幅の膨張を恐れながらものしたほんのはし
——以上は紙幅の膨張を恐れながらものしたほんのはし
が、風な論であるから、勿論論說としては體をなさないものであるけれど、係助詞同語說に楯つく事がもとより私の連用形を承ける終助詞所謂係助詞の終置用法を含む。はなく、係助詞「こそ」にこの語が動詞の連用形を承ける事も疑はしい。他に動詞の連用形を承ける終助詞謂用法を含む。

と全く同一用法に立つ「ぞ」「か」等は用言に終置されるとその連體形をうける事から考へて、この終置的な「こそ」の接續は一考を要する問題である。最後に、語形や用法から考へて必ずこの語の同系語と考へられるものに「こす」「こそ」があるが、希求の「こそ」を係詞「こそ」の終置用法と考へる時には、その係詞の「こそ」と「こす」「こせ」の關係は如何に考へらるべきであらうか。或はかの論者達は、希求をあらはす「こそ」と「こす」「こせ」の一系との直接の交渉をしも否定するかも知れない。さうすればもとより問題はないのであるが、尙我々には、いささかの客觀的な理由もあ

つて、それらが三者同系語であると考へるのが正しい様に思はれる。この事は何れ本論において述べたいと思ふ。——以上は紙幅の膨張を恐れながらものしたほんのはしが、風な論であるから、勿論論說としては體をなさないものであるけれど、係助詞同語說に楯つく事がもとより私の本旨ではないのであるから、今は更に深く立入る事をさけたいと思ふ。此處には唯かの係助詞同語說に對する私の疑惑を、一應疑念として明らかにするに止めて置きたいのである。

私は、以下この小論に於て、希求の助詞「こそ」の本性に關して一つの新しい考へ方を提起しようとする。それは今までの論說においても、しばしば觸れられようとしてわづかに觸れられなかつた考案であり、かの係助詞同語說に對して全く對蹠的な立場に立つ所論であるが、それにも係らず、前掲係助詞同語說に對する四個の疑條は、以下私自身の所論を展開させるに際しても常に新しい一つの指針となるものであつたと言ふ事を、今は特に銘記して置かなければならぬ。

(註一)山田孝雄博士「日本文法論」

二

「こそ」—

二・119

吉野川逝く瀬の速みしましも淀む事なく有巨勢漫香毛、

十・1973 我妹子にあぶちの花は散りすぎず今咲けるごと有與奴香聞

私は最初に、希求の「こそ」を「こそ」「こせ」と關聯させて考へたいと思ふので、今しばらく「こそ」「こせ」と一語の用語例を調査する必要がある。

「こそ」—

八・1657 官^{ツサカ}にも許したまへり今夜のみ飲まむ酒かも散許須奈由^{ヨビ}

主・8702 竹敷の浦まの黄葉我ゆきて歸り来るまで知里須奈由^{ヨビ}

四・660 汝^ナをと吾^アを人ぞ離くなるいで吾君人の中言聞越名湯目^モ

(越カ)

士・2375 我ゆ後生れし人は我が如く戀する道に相與勿湯目^モ

全八例、すべて禁止の「な」を取り、しかも原義不明の副詞「ゆめ」を續けた形であつて、すでに奈良朝時代において固定した慣用句であつた事を考へさせる。先行動詞が八例中五例まで「散り」である事實等も考へ合はせて良いであらう。この本義は後に説く。

—以上「こそ」—

「こそ」は「こそぬかも」「こそね」の二つの形で現はれる。

前者は否定詠歎から由來する希求の「ぬかも」「ぬ」を希求言^モす處では何れでも尋はない。を後續し、後者は希求の「ね」に續く。

「こそぬかも」は全九例中、前掲第三例歌の他はすべて「有

九・1679 紀の國に止まず通はむ妻の杜妻依來西尼妻と言ひ乍ら
士・2057 庭に立つ麻で小衾^{ヨビ}今夜だに都麻余之許西^モ禪^{カケ}麻で小衾^モ

記代 さ野つ鳥雉子はとよむ庭つ鳥鶴は鳴くられたくも鳴くなる鳥かこの鳥も宇知夜米^{ママ}許世泥^モ…

太子^{セイテイ}山しるのうでの枝々水金丹^{ママ}相見社根^{カケ}うでの枝々^{セイテイ}開記に^{セイテイ}第補^{セイテイ}
四句^{セイテイ}相看日世福^{セイテイ}さあり。(ママ)

り」に後續する。「こせね」の用例は極めて少く、まづ古くは前記の四例に限られて居た様であるが、これには少し問題があるので、次にはやや詳しく扱つて見たいと思ふ。

卷九の例歌で、「來西尼」をコセネ又はコセニ、此處では何れでも構はない。此處では何れでも構はない。は「ヨソリ」の訛りではなからうかと思ふ。と讀む事は略々確實であるとしても、「依」をヨシと讀む如きはやはり卷十四の例歌の假名書を典據にして居る考へなければなるまい。卷十四の例歌の「余之」が果して「依」であるか否かは疑がないわけではないけれど、かりに今「依」でないとすれば、卷九の例歌はヨセコセネの如く改訓すれば良いのであるから、實際問題としては、卷十四の場合、余之を依以外に考へる事は不可能であらう。尚古代の東國方言には、「いそべ」「おしべ」、「こえだ」「こやで」註11の如きものが見られるやうである。「よそる」は殊に東歌に多いものであつて、ほゞ「依る」と同意と思はれる。かたがた私はこの場合は「よそり來まぬ」でないかと思ふ。神代紀の歌は難解であるが、ともかく「依る」と同時に用ゐられて居る點からは自動詞と考へるのが穩當であらうと思ふ。これらは何れも不確實な例ではあるが、どちらかと言へば、何れも「依し」を自動詞と考へる方が自然ではあるまいか。萬葉集に「由」を「依」とする例が多いのも、又同様な自動詞に由來するものと考へるべきであらう。さて、卷九・卷十四の例歌にかへつてその意味を考へるに、「よしこせね」は何れも妻を目的語と

3469
古・タ占にも今夜と宜らる我背なはあぜぞも今夜與斯昌伎
麻左奴
神代 片瀬に網張り渡し妹恋豫嗣豫嗣利據綿石川片瀬等の例であつて、前者は「依しろ來まさぬ」「ろは因接助詞」と希求の助詞「こそ」の攷

說かれ、後者は「目ろ依しに依し依り來ぬ」と說かれて居るものである。このうち前者は、かう說けば「依し」は四段恐らく下一段で自動詞であるが、尚間接助詞「ろ」が熟語動詞の中に介入する例は他に見あたらないので、私は、新考も言ふやうに、この例は「よそり」の訛りではなからうかと思ふ。かかる所謂母音錯置の現象は國語史上珍らしいものではあるけれど、尚古代の東國方言には、「いそべ」「おしべ」、「こえだ」「こやで」註11の如きものが見られるやうである。「よそる」は殊に東歌に多いものであつて、ほゞ「依る」と同意と思はれる。かたがた私はこの場合は「よそり來まぬ」でないかと思ふ。神代紀の歌は難解であるが、ともかく「依る」と同時に用ゐられて居る點からは自動詞と考へるのが穩當であらうと思ふ。これらは何れも不確實な例ではあるが、どちらかと言へば、何れも「依し」を自動詞と考へる方が自然ではあるまいか。萬葉集に「由」を「依」とする例が多いのも、又同様な自動詞に由來するものと考へるべきであらう。さて、卷九・卷十四の例歌にかへつてその意味を考へるに、「よしこせね」は何れも妻を目的語と

して他動的—かりに、かかる語を用ゐるとすれば—又は使役的な意味をあらはすものとすべく、今「よし」を自動詞と假定すれば、必ず「こそ」がさる他動的、又は使役的の意味をあらはすものとしなければなるまい。しかしてもしさうとすれば、かの二例歌の「こそ」は上述「こせぬかも」の「こせ」に對して全く別個な用ゐられさまであるとしなければならないのであらうか。二者を同一語と考へる立場にあつては、たしかにこの事實には一考を要するのである。

私が今此の窮境を脱しようとすれば、當然他動的、又は使役的な用法に立つ「依す」の存在を論じなければならぬ。不幸にして私は今その適例を持合はせて居ないけれど、唯一つ間接的ながらその存在を裏書するに十分な材料として、敬動詞「任す」^(ヨサ)の語例を考へる。

詔第一 天都神乃御子隨母天坐神之依。奉之隨……
詔第五 吾孫將ノ知食國天下止與佐斯奉事麻爾麻爾……
新年 皇神等能依。左奉辛奥津御年乎…… 八東穗能伊加志穂爾皇
神等能依。左奉者……

以上、「こそ」「こせ」の用語例について概観した。次にこ

「よさす」は「依さす」であり、その委任、寄託の意を最も端的にあらはすのは新年祭の祝詞であるが、此處に「す」は所謂崇敬の助動詞と言はれるものであり、その原語としての「依す」と言ふ語の存在が考へられるのである。「依さす」が他動詞である以上、「依す」も必ず他動詞であらう。そして活用語尾のア列音尾から崇敬の「す」を後續する動詞は、文獻上極めて少數の例外を除いて殆ど四段活用であると考へられるから、「よさす」の原形である「依す」もほぼ四段活用と推定されるべく、従つて「依し」と言ふ他動詞の連用形が考へられるであらう。かかる「依し」が考へられるとすれば、上述の二例歌の「こせぬ」はかの「こせぬかも」と同様にその「こせ」を考へる事が出来るであらう。更に記の例歌については、「やめ」は他動詞「止め」と考へる説に從ふべく、聖德太子傳曆の例歌は意義未詳であるけれど、「社根」が「こせネ」と讀まれる事は、かの補闕記中に採録された同一歌^{(誤成がある事だけは確實である。) に「已世禱」と假名書}のある事から明白である。

の二語の性質を考へて見よう。

(一) まづ第一には、共に希求、命令等に關係のある語らしいと言ふ事である。

これは、「二語が必ずその下に、「な」の様を禁止—否定命令の語や、「ぬかも」「ね」の如き希求の語を續ける事から考へられる。

(二) 次には、それらが動詞性のものらしいと言ふ事である。これは動詞—必ず動詞—の連用形に後續して、しかもその下に「な」「ぬ」「ね」の如き動詞特有の接辭を接續させるからである。

(三) 更に考へれば、「ね」「ぬ」を後續する形「こそ」はその動詞の未然形であり、又禁止の「な」を後續する形「こす」はその終止形と考へられる。

これはすでに、奈良朝文法史に論ぜられた立場であるが、しかも山田博士が下二段と断ぜられたのはまだ疑問があらう。私の立場は後に詳論するやうにこれをサ行變格と推定する。（註四）適用形の用例が見えないのであるから、サ行變格説は少くとも下二段説と同程度には主張出来る筈である。

私は此處で、「こそ」「こせ」の一系の形式動詞と所謂希求の「こそ」との關係を考へなければならぬ。

まづその兩者の形を比較すると、その語幹と思はれる共通部の第一音節は皆「こ」であり、形式部と思はれる第二音節はそれぞれ「せ」「す」「そ」のサ行音である事は、確に著しい兩者の類似を示して居るし、又古代文獻における表記を觀察しても、「こそ」「こせ」を共通にあらはす唯一の文字である「與」は又「こそ」をあらはすに用ゐられ、（二）には同卷

中にそのすべて當時の「こそ」の専用假名である「社」は聖德太子傳曆にあらはれて「社根」となり、資料としてはやや疑問があるとは言へ、かの補闕記においてコセネと言ふ如き古訓の傳へられるのを考へると、これら三語の同一系に屬するものではないかと言ふ疑はさして無稽な空想でもない事が思はれる。下句に類想をうたつた

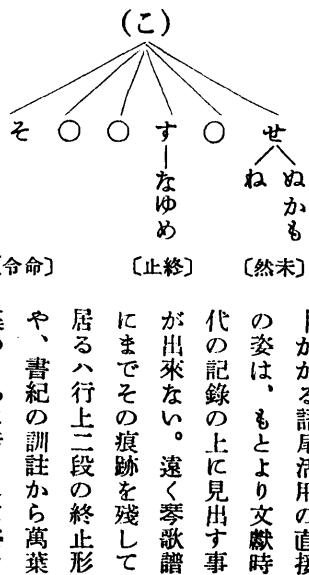
十・2057月累ね我が思ふ妹に逢へる夜は今し七夜を續五夢奴鴨

六・四天に座す月讀壯子まひはせむ今夜ヨヒの長き五百夜繼許者等は、まさにその疑を決定的にする一つの材料とも言へるであらう。これはまた、上位語に對する三語の承接關係からも考へられる。即ちこの三者は、共に必ず動詞の連用形に續くのである。希求の「こそ」が助詞の連用形をうける特徴的な接続法を有する事は前に述べたが、それは大體觀念語から轉成した場合を除いて本来の接辭類には見られない性質であるから、此處に「こそ」は必然的に用言性のものでなければならぬ。これも今の場合の有力な一證となりうる。これらの中の理由から、私は今希求の「こそ」を以て、形式動詞「こそ」の一つの語例と考へたい。根柢は後述する別の少くともさう考へる事は、係詞「こそ」の終置的用法と考へるよりも種々な點で妥當であらうと考へるのであつて、例へば上掲の四個の疑條の如きもこの立場では忽ちに解決される事を注意しなければならない。唯次に、それでは果して「こそ」は「こそ」の如何なる活用形であるかと言ふ事になると、これは既定の活用圖の中のサ行オ列のものがないので、その上に機械的に定位させる事は極めて困難である。従つて、それは「こそ」「こそ」に對する「こそ」形の性質を精密に調査した上で、歸納的に一つの新しい活用形を創設するより他はない。

私の提案は、所謂希求の助詞「こそ」を以て形式用言「こそ」の命令形と考へようとするものにある。その時此處には左表の如き、「こ」を語幹とし、「せ」「す」「そ」を變化語尾とする極めて畸形な一つの活用圖がなり立つであらう。語幹の「こ」の事については後に述べる。次にはしばらくその畸形な變化語尾が何であるかを述べなければならない。

一かかる語尾活用の直接の姿は、もとより文獻時

三



代の記録の上に見出す事が出來ない。遠く琴歌譜にまでその痕跡を残して居るハ行上二段の終止形見せて居るワ行上二段の終止形等よりは更に古く、恐らく語源時代から傳承時代のさ中につけて没落したと思はれる一つの古い活用として、私は次にこの活用形を説かうとするのである。

(註一)卷十四、三三五九、三四九三。動詞の例としては、卷二十、四三四三に「於米保等」—「オモヘド」のオ、エの錯置がある。

(註二)寝す、撫す、帶す、臥す、有す^{宣命}等。この中、帶ぶは特殊假名遣によれば當時は四段らしく、臥^フゆは活用不明。

(註四)奈良朝文法史。古く林陰雄の説あり。

希求の助詞「こそ」の攷

傳承時代に死滅した語法の直接の姿を文獻時代の記録の上に見る事は困難である。しかし又文獻時代の諸記録の中には、必ずや傳承時代からの長い歴史を擔うて來た古い語彙や語法が残つても居るにちがひない。しかもさうした事實をそれぞれに傳へて居る事も多いであらうけれど、又古代國語における特定の一つの事實から分化して、各々その個性の方向に發展して行つたいくつかの同系語である場合もあつたであらう。前者における古語乃至古語法の遺存は唯單に断片的であり、孤立的であるが、後者におけるそれは集中的であり、系統的であると言ふ事が出来る。さうしてそれが集中的であり、系統的であるが爲に、その相互の諸性質を厳密に比較探討する時には、ある程度までその祖語乃至祖語法の性質を復原する事の可能な折がある。

我々の場合の如き、殆ど横への關聯を有しない古代國語等を對象とする場合には、勢ひ縦の關聯を唯一の據所とした

ければならないのであるが、蓋しその場合に學的に許され得る比較的に安全な唯一つの方法は、さうした遺存語のある一系列表を中心として求心的にその祖語乃至は祖語法の性質を復原しようとする事である。勿論これは必ずしも發生時代の窮屈的な諸性質にまで溯源する事は出来ないけれど、尙文獻時代に接した傳承時代のある擴りには十分に適用する事の出来る方法なのである。

文獻時代の初頭には、すでに「な—そ」と言ふ禁止格があはれて居たが、又これに對立して「な—」と言ふ形もあつた。

八千矛の神の命 萩草のめにしあれば 吾が心浦清の鳥ぞ
命はな死せたまひそ 青山に日がかくらば ねば玉の夜
は出でなむ 真玉手玉手差し纏き 股長にいは綾さむを
あやにな戀ひきこし 冠^{代卷}神

この二形の發生の前後については今までにも度々論ぜられて來たのであるが、現在ではほぼ「な—」を原形として、「そ」は一次的な添加による終助詞であつたとする説が一般になつて居る。その論據としては明らかでないけれ

ど、私はほぼ、「な—」は「な—そ」と比較して目なれない形、後に殘らない形であると言ふ點で古語らしいと言ふ考へと、「な—そ」の語構成上の説明がつかない爲に、一應

「そ」をかく考へる事によつてその構成上の説明が一見容易になりさうだと言ふ考へと、その二つの考へ方が心理的にはその立論の基調をなして居るとして差支ないと思ふ。

その他には少くともさう断定すべき積極的な論據は存在しない様に思はれるのである。(註五) しばしば論著者によつて引用される、かく考へる事によつて、古語史における「な—」は勿論である。上次には順序として、その他の積極的な論據がない事は勿論である。二つの考へ方の當否を論じなければならない。

第一の考へ方——それは多くの場合にはあるいは眞理であるかも知れないが、又少からざる場合において、眞理でない事もありうる。目なれない形、後に殘らない形は、勿論それが古語の殘存であるからの場合もあらうが、又目なれない形、後に殘らない形であるだけに、かへつて特定の、局限されたことばであつたかも知れないのである。例へば中古の延喜前後につけて「べら」と言ふ語があつた。

—國語史の據ふ眞理は長いのである。我々は、少くとも國語學的にある時代説を見る場合は、又同時に必ずその時代性に耽溺された複雑性に陥つてはならない。—

これは極めて特別の場合を除いては「べらなり」と言ふ連

なければならないのである。

語のうちにあらはれるのであるが、古今集の歌語における「べらなり」の用例が「べし」「べかり」等の用例を遙に凌駕するものである事は言ふまでもない。しかして今かりに我文献時代の上限を古今集時代に置くと假想すれば、その文献時代の初頭にあらはれる筈の「べらなり」と言ふ語は、まさにこの目なれない形、後に残らない形であるに相違ないものである。又やや降つて、院政の末期になると、例へば「かなしし」^(註六)、「やさしし」^(註七)の如き諸例があらはれる。今かりに此處に文献時代の上限を豫想すれば、それは又まさしく目なれない形、後に残らない形と言ふ條件を満足する筈であらう。しかも前者は形容詞語幹に「ら」の接續したと言ふ點で古めかしく、後者は又我がシク活用の最も合理化された終止形を有するとの點で、必ずシク活用終止形の原體と考へられさうな形であるにおいては、それ以前の時代に文獻を缺く場合、かかる論者達によつて古語の遺存であると説かれる事必定であらう。これをかの「なー」の禁止格の推定に思ひ合はせて、我々は唯その輕舉であつた事を怖れ

第二の考へ方——これは實は別に「なーそ」の語構成の説明がつけば、論據としての積極性はなくなるわけであるが、尙はじめにいさか述べて見ようと思ふ。前にも觸れた様に、「そ」を終助詞とする事には別に積極的な理由があるわけではなく、「なー」と比較してその語構成を論じよう

とする必要から、自然に生れる立場であつた。

勿論常陸風土記
の奈古非穀

引いてその論證とする説もあるが、まづそれが果して「ぞ」であるか否かは同書の他に字母の消滅^(註八)記載等の中央文獻を標準にして「混用から考へて疑はしく、又からにしそであつたとしてもそれは中國方言をあらはす偶然の一例であつたかも分らないし、それらを皆誤歩するとして、尙例で全體を律する事の危険さを思はねはならない。無責任に方言周圍論などを援用して古語よほしかして、かりに「そ」を知らぬ事は方言周圍論にこつて迷惑である。

がかかる二次的な發生にかかるものとしても、尙後に残された「なー」が如何に解決されようとするのであるか私は知らない。唯一つ、今は「なー」を係助詞とし、それに後續する動詞の連用形をその結と考へようとする説が行はれて居るが、これとてもやはり疑問はあるのである。

一體連用形の結びと言ふものは他の係詞にはあらはれないものであるが、又所謂係結と言ふのは、係詞の勢力が直接に述語の上に作いてそれに一定の形態を要求するも

のであるから、この論は必ずしも發生的に言ふのではない。係詞の持つ性質とそれに對應する述語の形態とは必然的な關聯に立つ筈のものであつて、それから考へると、禁止の「な」の本性が用言の連用形の上に如何なる直接の關聯を持つかと言ふ事が明らかにならない限り、永久にそれは一つの便宜論の域を出ないものであらう。しかし、これは係結そのものの本性が不明である今日にあつては、尙確定的な論議の主題とはならないので、保留して置くより他はない。けれど、それは別としても、「な」を係助詞と考へる事にして既に疑問がある。勉めて此處では文法論はさけるつもりであるが、以下當面の問題に必要な限り、禁止の「な」について簡単に敍する事を許されたい。

最近殊に頻と言はれる事であるが、「な」は他の助詞に異つて語頭に立つ事が出来るのである。「な散りそ、花」とは言へるに對して、「か散る、花」とか「こそ散れ、花」とかが言ひ得ない事は言ふまでもないが、唯「な」が文中にある場合には、時に他の係助詞との區別が判然しないかに見える時がある。たとへば、「花な散りそ」「花か散る」の如き場合

であるが、この時は文中に係助詞の「も」を狹み、更に「べたく」等の副詞をして用言「散る」を裝定させて見ると、

花も=な散りそ 花か=いたく=散る

の如く、「か」は上位の文節に屬する(註)に對して、「な」は明らかに下位の文節に主位して屬する事が知られる。この現象は勿論「な」「いたく」以外の語に關しても同様であつて、

「な」は依然として文節の主位に立つものである事が知られるのである。短歌の句絶はほぼ文節の分界に一致する筈のものであるが、その場合に所謂係詞は多く句末につき、「な」は多く句頭に來る理由も此處に存するのである。勿論純粹に係助詞風な用法も全くないと言ふのではない。中古時代の文獻ではむしろさうした例が多いのであるけれど、當面の問題となつて居る古代文獻ではまた十分にかかる用法の發達は見なかつたと思はれる。例へばその代表的文獻である萬葉集においても、

二・¹⁷²島の宮上の池なる放ち荒備、勿行君まさすとも
アラビナユキシ

二・¹⁸⁰御立せし島をも家と住む島も荒備、勿行年かはるまで
アラビナユキシ

の如き熟語中に介在する例の數個を見るにすぎないのであつて、推してその大概は知られるであらう。しかしてこれら的事實から考へると、あるいはこの係助詞的用法はむしろ後代の發達にかかるものではなからうかとの疑も出る。萬葉集卷二の四¹²の本文に「勿散亂曾^{ナチリハタケ}」とあり、同時に

「一云知里勿亂曾^{チリナミタケ}」^(註十)と註記の見えるのは、その間の事情を明らかにするものと言ひ得るであらう。そして一方、東歌に「な咲き出でそね」があり、卷十の春雜歌に「な呼びとよめそ」等のある事は、當時少くともかかる熟語に前立する用法が「な」に存在した事を實證するものとして注目すべきである。とにかく、禁止の「な」は、かく概して文節の頭に出ようとする傾向のある點が、他の係助詞と全くその性質を異にする所であるが、尙その發達上の過程を考慮に入れ時には、むしろかの極めて特殊な前立的用法が本來のものであり、それが語形への類推と原意義の消失とから次第に單音節の係助詞に近く用ゐられて行つたのであらうと考へるのが至當であつて、本來の係助詞風な用法から後に

唯一の例外的な前立的用法を分化して行つたと考へる事は、何か其處に特別な契機の發見せられない限り困難な事であらうと思ふ。「な」の發生的本質については又稿を改めて書きたいと思はるが、此處ではごく簡単にその一端をのべて置きたい。私は「な」は形容詞「なし」の語幹に直接關係する語の構造的用法であることを考へる。形容詞の「高し」「いたし」「はやし」の語幹から出る「な」「いた」「はや」がそれぞれ用言を結合的に裝定して「高まる」「いたなく」「はやか」にさせ、「坡終節語^ミの緊密度の順」の如き然語又は連語をつくる同じく、用言に緊密に上位して否定的にそれを裝定する語であつたらうと考へるのである。偶詳語、アイヌ語等の近隣語における前立的な一種の否定詞^ミ似似したものであり、唯その出元が分別的な形容詞語幹^ミに過ぎない。そして後には比較的音節の大いにあつた「はや」等は避離して副詞^ミなり、音節に乏しい單音節の「な」は係助「風」に組推された結果、文節頭から次第にその從属的位置にまで衰退して行つたと考へられる。

かくて私は所謂禁止の「な」が、少くとも發生的にかの係助詞と言はれるものとは全然別個な語である事を考定した。そしてその本來的な用法はほぼ奈良時代に至るまで國語の上に明らかな痕跡を残して居る所以をも確實にしたのであつた。此處に於て、「な」が所謂係結の理法によつて解かれる可能性は全くなくなつたのである。他に「な」の禁止格の構成を説明する方法を私は思ひつかない。恐らく「な」の原形説は上述の論理上の破綻をつぐなはない限り、その可能性はあるまいと思ふ。

實際萬葉集における「な」形の用例は少いが、「な思ひ

我背「雲なたなびき」等の慣用語として固定したものが多く、又殆ど七音句、五音句の音數律に制約せられた場合に限つて居るやうである上に、上にあけた沼河原の唱和の中のは、すでに前後の六音脚に制せられて居る。單音節の動詞に關する實例がないとか、「なーそ」が自由に「ね補に」を取つて「なーそね補にな」となるに反して、これは全くいかなる助詞も後續しないとか、さうしたいくつかの特徵を數へあげると、それが「なーそ」に對して餘程局限された擴りしか持たない言葉であつたらう事は否めない。それが古語の殘存ではないかと言ふを上流の場合は反對の事實がある。その當否は主として他の資料との照合によればはならぬ。そして、しかも祝詞や宣命の様な古い儀用語を比較的多く残して居る資料にあつて、むしろ「なーそ」を正格として居るらしい事から考へて、「なー」が古く専用された儀用語などではなかつた事は確實であらう。これらの文獻的事實から考へても、依然として「なー」形原形説を利しさうな材料は見つからない。

以上長々と述べた事は、要するに「なー」形には實證的にも理論的にも積極的な支持を與へる事が出來ないと言ふ事であつた。そして、その折々にも述べて來たやうに、む



しろ「なー」原形説は積極的な缺陷をさへ時に暴露する事があつたのである。此處に至つて、我々はむしろ「なーそ」の格をしてその本來のものと考へなければならぬと思ふ。つまり「なーそ」の格を起原として、「なー」を二次的の省略形言語體裁を主として言へば、あるいはそは終助詞への類推から、と考へるのである。それではこの連語構成は如何にして説明せられるかと言ふと、私はさきに「な」について述べたやうな立場から、「なーそ」と分解する事は當然であつて、この「ーそ」こそは上述のサ行變格動詞の古い命令形、「そ」に關係するものとして説きたいのである。即ち「ーそ」は形式動詞「爲」を後續した複合動詞例へば、忘れせぬ・死にする・枯れすれば・欲ります。うつくしみの如きもので、古代語法において恐らくないもの。の古い命令形と説くのである。禁止とは否定命令である。従つて否定の副詞「な」が用言の古格の命令形を裝定して禁止の意味を完成する事は理論的に最も穩當であるばかりでなく、又かかる禁止の表示法は諸外國語の語法に微

(註四) O. Jespersen: Negation in English and other

Languages 等參照

(註五) この語が、カナシイ、ヤサシイ等の口語から、赤イ↑

赤し、長イ↑長し等への推進によつて逆に生じたものである事はすでに定説となつて居る。

(註六) 新治郡—許智多難波乎婆頭勢夜麻能伊波歸爾母爲豆許母郎奈牟奈古非敍和支母

(註八) 山田博士—「日本文法論」、松下大三郎氏—「標準日本文典」等。

(註九) 橋本進吉博士—「國語法要説」、その他同博士の御執筆にかかる語法書參照。

(註十) この結論を不す爲には卷二の一云の性質を調べなればならないが、今詳論は略する。但し¹⁰⁰の歌中の由布

乃林等は明らかに布由乃林の誤字から生じた異傳であ

るらしく、¹⁰⁵の位置不詳の室上山の如きも屋上山から

の字割の類似から生じた異傳とも見られるであらう。

又¹⁰⁶の一云由遊志計禮杼母は形容詞の活尾發達の歴史の上から當時のものとしては疑問があると言ふ事である。^{春日政治}これらは何れも作歌時代以後における異傳の註記と考へられる。

希求の助詞「こそ」の攷

(註十一) この點からは、文法的にも特定副詞と考へる徳田淨

氏の高説は同感出来る。(同氏著「國語法考説」參照)

(註十二) 夜七日臺七日吾乎奈見給比¹⁰⁷(重火祭)、人乃見咎事和射

奈世¹⁰⁸(十六)今往前然莫爲止宣(十八詔¹⁰⁹諸漢文體實命で、萬葉集會¹¹⁰)¹¹¹の「¹¹²」の例¹¹³、¹¹⁴、¹¹⁵、¹¹⁶、¹¹⁷、¹¹⁸、¹¹⁹、¹²⁰、¹²¹、¹²²、¹²³、¹²⁴、¹²⁵、¹²⁶、¹²⁷、¹²⁸、¹²⁹、¹³⁰、¹³¹、¹³²、¹³³、¹³⁴、¹³⁵、¹³⁶、¹³⁷、¹³⁸、¹³⁹、¹⁴⁰、¹⁴¹、¹⁴²、¹⁴³、¹⁴⁴、¹⁴⁵、¹⁴⁶、¹⁴⁷、¹⁴⁸、¹⁴⁹、¹⁵⁰、¹⁵¹、¹⁵²、¹⁵³、¹⁵⁴、¹⁵⁵、¹⁵⁶、¹⁵⁷、¹⁵⁸、¹⁵⁹、¹⁶⁰、¹⁶¹、¹⁶²、¹⁶³、¹⁶⁴、¹⁶⁵、¹⁶⁶、¹⁶⁷、¹⁶⁸、¹⁶⁹、¹⁷⁰、¹⁷¹、¹⁷²、¹⁷³、¹⁷⁴、¹⁷⁵、¹⁷⁶、¹⁷⁷、¹⁷⁸、¹⁷⁹、¹⁸⁰、¹⁸¹、¹⁸²、¹⁸³、¹⁸⁴、¹⁸⁵、¹⁸⁶、¹⁸⁷、¹⁸⁸、¹⁸⁹、¹⁹⁰、¹⁹¹、¹⁹²、¹⁹³、¹⁹⁴、¹⁹⁵、¹⁹⁶、¹⁹⁷、¹⁹⁸、¹⁹⁹、²⁰⁰、²⁰¹、²⁰²、²⁰³、²⁰⁴、²⁰⁵、²⁰⁶、²⁰⁷、²⁰⁸、²⁰⁹、²¹⁰、²¹¹、²¹²、²¹³、²¹⁴、²¹⁵、²¹⁶、²¹⁷、²¹⁸、²¹⁹、²²⁰、²²¹、²²²、²²³、²²⁴、²²⁵、²²⁶、²²⁷、²²⁸、²²⁹、²³⁰、²³¹、²³²、²³³、²³⁴、²³⁵、²³⁶、²³⁷、²³⁸、²³⁹、²⁴⁰、²⁴¹、²⁴²、²⁴³、²⁴⁴、²⁴⁵、²⁴⁶、²⁴⁷、²⁴⁸、²⁴⁹、²⁵⁰、²⁵¹、²⁵²、²⁵³、²⁵⁴、²⁵⁵、²⁵⁶、²⁵⁷、²⁵⁸、²⁵⁹、²⁶⁰、²⁶¹、²⁶²、²⁶³、²⁶⁴、²⁶⁵、²⁶⁶、²⁶⁷、²⁶⁸、²⁶⁹、²⁷⁰、²⁷¹、²⁷²、²⁷³、²⁷⁴、²⁷⁵、²⁷⁶、²⁷⁷、²⁷⁸、²⁷⁹、²⁸⁰、²⁸¹、²⁸²、²⁸³、²⁸⁴、²⁸⁵、²⁸⁶、²⁸⁷、²⁸⁸、²⁸⁹、²⁹⁰、²⁹¹、²⁹²、²⁹³、²⁹⁴、²⁹⁵、²⁹⁶、²⁹⁷、²⁹⁸、²⁹⁹、³⁰⁰、³⁰¹、³⁰²、³⁰³、³⁰⁴、³⁰⁵、³⁰⁶、³⁰⁷、³⁰⁸、³⁰⁹、³¹⁰、³¹¹、³¹²、³¹³、³¹⁴、³¹⁵、³¹⁶、³¹⁷、³¹⁸、³¹⁹、³²⁰、³²¹、³²²、³²³、³²⁴、³²⁵、³²⁶、³²⁷、³²⁸、³²⁹、³³⁰、³³¹、³³²、³³³、³³⁴、³³⁵、³³⁶、³³⁷、³³⁸、³³⁹、³⁴⁰、³⁴¹、³⁴²、³⁴³、³⁴⁴、³⁴⁵、³⁴⁶、³⁴⁷、³⁴⁸、³⁴⁹、³⁵⁰、³⁵¹、³⁵²、³⁵³、³⁵⁴、³⁵⁵、³⁵⁶、³⁵⁷、³⁵⁸、³⁵⁹、³⁶⁰、³⁶¹、³⁶²、³⁶³、³⁶⁴、³⁶⁵、³⁶⁶、³⁶⁷、³⁶⁸、³⁶⁹、³⁷⁰、³⁷¹、³⁷²、³⁷³、³⁷⁴、³⁷⁵、³⁷⁶、³⁷⁷、³⁷⁸、³⁷⁹、³⁸⁰、³⁸¹、³⁸²、³⁸³、³⁸⁴、³⁸⁵、³⁸⁶、³⁸⁷、³⁸⁸、³⁸⁹、³⁹⁰、³⁹¹、³⁹²、³⁹³、³⁹⁴、³⁹⁵、³⁹⁶、³⁹⁷、³⁹⁸、³⁹⁹、⁴⁰⁰、⁴⁰¹、⁴⁰²、⁴⁰³、⁴⁰⁴、⁴⁰⁵、⁴⁰⁶、⁴⁰⁷、⁴⁰⁸、⁴⁰⁹、⁴¹⁰、⁴¹¹、⁴¹²、⁴¹³、⁴¹⁴、⁴¹⁵、⁴¹⁶、⁴¹⁷、⁴¹⁸、⁴¹⁹、⁴²⁰、⁴²¹、⁴²²、⁴²³、⁴²⁴、⁴²⁵、⁴²⁶、⁴²⁷、⁴²⁸、⁴²⁹、⁴³⁰、⁴³¹、⁴³²、⁴³³、⁴³⁴、⁴³⁵、⁴³⁶、⁴³⁷、⁴³⁸、⁴³⁹、⁴⁴⁰、⁴⁴¹、⁴⁴²、⁴⁴³、⁴⁴⁴、⁴⁴⁵、⁴⁴⁶、⁴⁴⁷、⁴⁴⁸、⁴⁴⁹、⁴⁵⁰、⁴⁵¹、⁴⁵²、⁴⁵³、⁴⁵⁴、⁴⁵⁵、⁴⁵⁶、⁴⁵⁷、⁴⁵⁸、⁴⁵⁹、⁴⁶⁰、⁴⁶¹、⁴⁶²、⁴⁶³、⁴⁶⁴、⁴⁶⁵、⁴⁶⁶、⁴⁶⁷、⁴⁶⁸、⁴⁶⁹、⁴⁷⁰、⁴⁷¹、⁴⁷²、⁴⁷³、⁴⁷⁴、⁴⁷⁵、⁴⁷⁶、⁴⁷⁷、⁴⁷⁸、⁴⁷⁹、⁴⁸⁰、⁴⁸¹、⁴⁸²、⁴⁸³、⁴⁸⁴、⁴⁸⁵、⁴⁸⁶、⁴⁸⁷、⁴⁸⁸、⁴⁸⁹、⁴⁹⁰、⁴⁹¹、⁴⁹²、⁴⁹³、⁴⁹⁴、⁴⁹⁵、⁴⁹⁶、⁴⁹⁷、⁴⁹⁸、⁴⁹⁹、⁵⁰⁰、⁵⁰¹、⁵⁰²、⁵⁰³、⁵⁰⁴、⁵⁰⁵、⁵⁰⁶、⁵⁰⁷、⁵⁰⁸、⁵⁰⁹、⁵¹⁰、⁵¹¹、⁵¹²、⁵¹³、⁵¹⁴、⁵¹⁵、⁵¹⁶、⁵¹⁷、⁵¹⁸、⁵¹⁹、⁵²⁰、⁵²¹、⁵²²、⁵²³、⁵²⁴、⁵²⁵、⁵²⁶、⁵²⁷、⁵²⁸、⁵²⁹、⁵³⁰、⁵³¹、⁵³²、⁵³³、⁵³⁴、⁵³⁵、⁵³⁶、⁵³⁷、⁵³⁸、⁵³⁹、⁵⁴⁰、⁵⁴¹、⁵⁴²、⁵⁴³、⁵⁴⁴、⁵⁴⁵、⁵⁴⁶、⁵⁴⁷、⁵⁴⁸、⁵⁴⁹、⁵⁵⁰、⁵⁵¹、⁵⁵²、⁵⁵³、⁵⁵⁴、⁵⁵⁵、⁵⁵⁶、⁵⁵⁷、⁵⁵⁸、⁵⁵⁹、⁵⁶⁰、⁵⁶¹、⁵⁶²、⁵⁶³、⁵⁶⁴、⁵⁶⁵、⁵⁶⁶、⁵⁶⁷、⁵⁶⁸、⁵⁶⁹、⁵⁷⁰、⁵⁷¹、⁵⁷²、⁵⁷³、⁵⁷⁴、⁵⁷⁵、⁵⁷⁶、⁵⁷⁷、⁵⁷⁸、⁵⁷⁹、⁵⁸⁰、⁵⁸¹、⁵⁸²、⁵⁸³、⁵⁸⁴、⁵⁸⁵、⁵⁸⁶、⁵⁸⁷、⁵⁸⁸、⁵⁸⁹、⁵⁹⁰、⁵⁹¹、⁵⁹²、⁵⁹³、⁵⁹⁴、⁵⁹⁵、⁵⁹⁶、⁵⁹⁷、⁵⁹⁸、⁵⁹⁹、⁶⁰⁰、⁶⁰¹、⁶⁰²、⁶⁰³、⁶⁰⁴、⁶⁰⁵、⁶⁰⁶、⁶⁰⁷、⁶⁰⁸、⁶⁰⁹、⁶¹⁰、⁶¹¹、⁶¹²、⁶¹³、⁶¹⁴、⁶¹⁵、⁶¹⁶、⁶¹⁷、⁶¹⁸、⁶¹⁹、⁶²⁰、⁶²¹、⁶²²、⁶²³、⁶²⁴、⁶²⁵、⁶²⁶、⁶²⁷、⁶²⁸、⁶²⁹、⁶³⁰、⁶³¹、⁶³²、⁶³³、⁶³⁴、⁶³⁵、⁶³⁶、⁶³⁷、⁶³⁸、⁶³⁹、⁶⁴⁰、⁶⁴¹、⁶⁴²、⁶⁴³、⁶⁴⁴、⁶⁴⁵、⁶⁴⁶、⁶⁴⁷、⁶⁴⁸、⁶⁴⁹、⁶⁵⁰、⁶⁵¹、⁶⁵²、⁶⁵³、⁶⁵⁴、⁶⁵⁵、⁶⁵⁶、⁶⁵⁷、⁶⁵⁸、⁶⁵⁹、⁶⁶⁰、⁶⁶¹、⁶⁶²、⁶⁶³、⁶⁶⁴、⁶⁶⁵、⁶⁶⁶、⁶⁶⁷、⁶⁶⁸、⁶⁶⁹、⁶⁷⁰、⁶⁷¹、⁶⁷²、⁶⁷³、⁶⁷⁴、⁶⁷⁵、⁶⁷⁶、⁶⁷⁷、⁶⁷⁸、⁶⁷⁹、⁶⁸⁰、⁶⁸¹、⁶⁸²、⁶⁸³、⁶⁸⁴、⁶⁸⁵、⁶⁸⁶、⁶⁸⁷、⁶⁸⁸、⁶⁸⁹、⁶⁹⁰、⁶⁹¹、⁶⁹²、⁶⁹³、⁶⁹⁴、⁶⁹⁵、⁶⁹⁶、⁶⁹⁷、⁶⁹⁸、⁶⁹⁹、⁷⁰⁰、⁷⁰¹、⁷⁰²、⁷⁰³、⁷⁰⁴、⁷⁰⁵、⁷⁰⁶、⁷⁰⁷、⁷⁰⁸、⁷⁰⁹、⁷¹⁰、⁷¹¹、⁷¹²、⁷¹³、⁷¹⁴、⁷¹⁵、⁷¹⁶、⁷¹⁷、⁷¹⁸、⁷¹⁹、⁷²⁰、⁷²¹、⁷²²、⁷²³、⁷²⁴、⁷²⁵、⁷²⁶、⁷²⁷、⁷²⁸、⁷²⁹、⁷³⁰、⁷³¹、⁷³²、⁷³³、⁷³⁴、⁷³⁵、⁷³⁶、⁷³⁷、⁷³⁸、⁷³⁹、⁷⁴⁰、⁷⁴¹、⁷⁴²、⁷⁴³、⁷⁴⁴、⁷⁴⁵、⁷⁴⁶、⁷⁴⁷、⁷⁴⁸、⁷⁴⁹、⁷⁵⁰、⁷⁵¹、⁷⁵²、⁷⁵³、⁷⁵⁴、⁷⁵⁵、⁷⁵⁶、⁷⁵⁷、⁷⁵⁸、⁷⁵⁹、⁷⁶⁰、⁷⁶¹、⁷⁶²、⁷⁶³、⁷⁶⁴、⁷⁶⁵、⁷⁶⁶、⁷⁶⁷、⁷⁶⁸、⁷⁶⁹、⁷⁷⁰、⁷⁷¹、⁷⁷²、⁷⁷³、⁷⁷⁴、⁷⁷⁵、⁷⁷⁶、⁷⁷⁷、⁷⁷⁸、⁷⁷⁹、⁷⁸⁰、⁷⁸¹、⁷⁸²、⁷⁸³、⁷⁸⁴、⁷⁸⁵、⁷⁸⁶、⁷⁸⁷、⁷⁸⁸、⁷⁸⁹、⁷⁹⁰、⁷⁹¹、⁷⁹²、⁷⁹³、⁷⁹⁴、⁷⁹⁵、⁷⁹⁶、⁷⁹⁷、⁷⁹⁸、⁷⁹⁹、⁸⁰⁰、⁸⁰¹、⁸⁰²、⁸⁰³、⁸⁰⁴、⁸⁰⁵、⁸⁰⁶、⁸⁰⁷、⁸⁰⁸、⁸⁰⁹、⁸¹⁰、⁸¹¹、⁸¹²、⁸¹³、⁸¹⁴、⁸¹⁵、⁸¹⁶、⁸¹⁷、⁸¹⁸、⁸¹⁹、⁸²⁰、⁸²¹、⁸²²、⁸²³、⁸²⁴、⁸²⁵、⁸²⁶、⁸²⁷、⁸²⁸、⁸²⁹、⁸³⁰、⁸³¹、⁸³²、⁸³³、⁸³⁴、⁸³⁵、⁸³⁶、⁸³⁷、⁸³⁸、⁸³⁹、⁸⁴⁰、⁸⁴¹、⁸⁴²、⁸⁴³、⁸⁴⁴、⁸⁴⁵、⁸⁴⁶、⁸⁴⁷、⁸⁴⁸、⁸⁴⁹、⁸⁵⁰、⁸⁵¹、⁸⁵²、⁸⁵³、⁸⁵⁴、⁸⁵⁵、⁸⁵⁶、⁸⁵⁷、⁸⁵⁸、⁸⁵⁹、⁸⁶⁰、⁸⁶¹、⁸⁶²、⁸⁶³、⁸⁶⁴、⁸⁶⁵、⁸⁶⁶、⁸⁶⁷、⁸⁶⁸、⁸⁶⁹、⁸⁷⁰、⁸⁷¹、⁸⁷²、⁸⁷³、⁸⁷⁴、⁸⁷⁵、⁸⁷⁶、⁸⁷⁷、⁸⁷⁸、⁸⁷⁹、⁸⁸⁰、⁸⁸¹、⁸⁸²、⁸⁸³、⁸⁸⁴、⁸⁸⁵、⁸⁸⁶、⁸⁸⁷、⁸⁸⁸、⁸⁸⁹、⁸⁹⁰、⁸⁹¹、⁸⁹²、⁸⁹³、⁸⁹⁴、⁸⁹⁵、⁸⁹⁶、⁸⁹⁷、⁸⁹⁸、⁸⁹⁹、⁹⁰⁰、⁹⁰¹、⁹⁰²、⁹⁰³、⁹⁰⁴、⁹⁰⁵、⁹⁰⁶、⁹⁰⁷、⁹⁰⁸、⁹⁰⁹、⁹¹⁰、⁹¹¹、⁹¹²、⁹¹³、⁹¹⁴、⁹¹⁵、⁹¹⁶、⁹¹⁷、⁹¹⁸、⁹¹⁹、⁹²⁰、⁹²¹、⁹²²、⁹²³、⁹²⁴、⁹²⁵、⁹²⁶、⁹²⁷、⁹²⁸、⁹²⁹、⁹³⁰、⁹³¹、⁹³²、⁹³³、⁹³⁴、⁹³⁵、⁹³⁶、⁹³⁷、⁹³⁸、⁹³⁹、⁹⁴⁰、⁹⁴¹、⁹⁴²、⁹⁴³、⁹⁴⁴、⁹⁴⁵、⁹⁴⁶、⁹⁴⁷、⁹⁴⁸、⁹⁴⁹、⁹⁵⁰、⁹⁵¹、⁹⁵²、⁹⁵³、⁹⁵⁴、⁹⁵⁵、⁹⁵⁶、⁹⁵⁷、⁹⁵⁸、⁹⁵⁹、⁹⁶⁰、⁹⁶¹、⁹⁶²、⁹⁶³、⁹⁶⁴、⁹⁶⁵、⁹⁶⁶、⁹⁶⁷、⁹⁶⁸、⁹⁶⁹、⁹⁷⁰、⁹⁷¹、⁹⁷²、⁹⁷³、⁹⁷⁴、⁹⁷⁵、⁹⁷⁶、⁹⁷⁷、⁹⁷⁸、⁹⁷⁹、⁹⁸⁰、⁹⁸¹、⁹⁸²、⁹⁸³、⁹⁸⁴、⁹⁸⁵、⁹⁸⁶、⁹⁸⁷、⁹⁸⁸、⁹⁸⁹、⁹⁹⁰、⁹⁹¹、⁹⁹²、⁹⁹³、⁹⁹⁴、⁹⁹⁵、⁹⁹⁶、⁹⁹⁷、⁹⁹⁸、⁹⁹⁹、¹⁰⁰⁰、¹⁰⁰¹、¹⁰⁰²、¹⁰⁰³、¹⁰⁰⁴、¹⁰⁰⁵、¹⁰⁰⁶、¹⁰⁰⁷、¹⁰⁰⁸、¹⁰⁰⁹、¹⁰¹⁰、¹⁰¹¹、¹⁰¹²、¹⁰¹³、¹⁰¹⁴、¹⁰¹⁵、¹⁰¹⁶、¹⁰¹⁷、¹⁰¹⁸、¹⁰¹⁹、¹⁰²⁰、¹⁰²¹、¹⁰²²、¹⁰²³、¹⁰²⁴、¹⁰²⁵、¹⁰²⁶、¹⁰²⁷、¹⁰²⁸、¹⁰²⁹、¹⁰³⁰、¹⁰³¹、¹⁰³²、¹⁰³³、¹⁰³⁴、¹⁰³⁵、¹⁰³⁶、¹⁰³⁷、¹⁰³⁸、¹⁰³⁹、¹⁰⁴⁰、¹⁰⁴¹、¹⁰⁴²、¹⁰⁴³、¹⁰⁴⁴、¹⁰⁴⁵、¹⁰⁴⁶、¹⁰⁴⁷、¹⁰⁴⁸、¹⁰⁴⁹、¹⁰⁵⁰、¹⁰⁵¹、¹⁰⁵²、¹⁰⁵³、¹⁰⁵⁴、¹⁰⁵⁵、¹⁰⁵⁶、¹⁰⁵⁷、¹⁰⁵⁸、¹⁰⁵⁹、¹⁰⁶⁰、¹⁰⁶¹、¹⁰⁶²、¹⁰⁶³、¹⁰⁶⁴、¹⁰⁶⁵、¹⁰⁶⁶、¹⁰⁶⁷、¹⁰⁶⁸、¹⁰⁶⁹、¹⁰⁷⁰、¹⁰⁷¹、¹⁰⁷²、¹⁰⁷³、¹⁰⁷⁴、¹⁰⁷⁵、¹⁰⁷⁶、¹⁰⁷⁷、¹⁰⁷⁸、¹⁰⁷⁹、¹⁰⁸⁰、¹⁰⁸¹、¹⁰⁸²、¹⁰⁸³、¹⁰⁸⁴、¹⁰⁸⁵、¹⁰⁸⁶、¹⁰⁸⁷、¹⁰⁸⁸、¹⁰⁸⁹、¹⁰⁹⁰、¹⁰⁹¹、¹⁰⁹²、¹⁰⁹³、¹⁰⁹⁴、¹⁰⁹⁵、¹⁰⁹⁶、¹⁰⁹⁷、¹⁰⁹⁸、¹⁰⁹⁹、¹¹⁰⁰、¹¹⁰¹、¹¹⁰²、¹¹⁰³、¹¹⁰⁴、¹¹⁰⁵、¹¹⁰⁶、¹¹⁰⁷、¹¹⁰⁸、¹¹⁰⁹、¹¹¹⁰、¹¹¹¹、¹¹¹²、¹¹¹³、¹¹¹⁴、¹¹¹⁵、¹¹¹⁶、¹¹¹⁷、¹¹¹⁸、¹¹¹⁹、¹¹²⁰、¹¹²¹、¹¹²²、¹¹²³、¹¹²⁴、¹¹²⁵、¹¹²⁶、¹¹²⁷、¹¹²⁸、¹¹²⁹、¹¹³⁰、¹¹³¹、¹¹³²、¹¹³³、¹¹³⁴、¹¹³⁵、¹¹³⁶、¹¹³⁷、¹¹³⁸、¹¹³⁹、¹¹⁴⁰、¹¹⁴¹、¹¹⁴²、¹¹⁴³、¹¹⁴⁴、¹¹⁴⁵、¹¹⁴⁶、¹¹⁴⁷、¹¹⁴⁸、¹¹⁴⁹、¹¹⁵⁰、¹¹⁵¹、¹¹⁵²、¹¹⁵³、¹¹⁵⁴、¹¹⁵⁵、¹¹⁵⁶、¹¹⁵⁷、¹¹⁵⁸、¹¹⁵⁹、¹¹⁶⁰、¹¹⁶¹、¹¹⁶²、¹¹⁶³、¹¹⁶⁴、¹¹⁶⁵、¹¹⁶⁶、¹¹⁶⁷、¹¹⁶⁸、¹¹⁶⁹、¹¹⁷⁰、¹¹⁷¹、¹¹⁷²、¹¹⁷³、¹¹⁷⁴、¹¹⁷⁵、¹¹⁷⁶、¹¹⁷⁷、¹¹⁷⁸、¹¹⁷⁹、¹¹⁸⁰、¹¹⁸¹、¹¹⁸²、¹¹⁸³、¹¹⁸⁴、¹¹⁸⁵、¹¹⁸⁶、¹¹⁸⁷、¹¹⁸⁸、¹¹⁸⁹、¹¹⁹⁰、¹¹⁹¹、¹¹⁹²、¹¹⁹³、¹¹⁹⁴、¹¹⁹⁵、¹¹⁹⁶、¹¹⁹⁷、¹¹⁹⁸、¹¹⁹⁹、¹²⁰⁰、¹²⁰¹、¹²⁰²、¹²⁰³、¹²⁰⁴、¹²⁰⁵、¹²⁰⁶、¹²⁰⁷、¹²⁰⁸、¹²⁰⁹、¹²¹⁰、¹²¹¹、¹²¹²、¹²¹³、¹²¹⁴、¹²¹⁵、¹²¹⁶、¹²¹⁷、¹²¹⁸、^{1219</}

合にのみあらはれる特徴であつて、すべての接辭類に對しても例外なくあらはれると言ふのでないから、一般にカ行變格活用の未然形が他活用の連用形に對應すると言ふ事にはならない。従つてその場合の承接から直接に「なーそ」の格の場合を説く事は許されないのである。勿論兩者間に語源的な關聯のあることは事でも發見さ〔註十〕「し」の場合は今は觸れない。此處では問題をただ禁止格の「なーそ」に限るとしても、カ行變格活用の場合にのみかかる現象のあらはれる事は、何かその兩者の間に存在する發生的な關聯性を疑はせるものであるが、現在は尙それに関する唯一箇の想定すら出て居ないのである。私は今それを説いて、「なーそ」の「そ」の影響と考へる。後にも説く様に、カ行變格活用はサ行變格活用と複合して「こす」となる〔きす〕ので、「なーこそ」と分解される「こそ」は即ちその命令形であると考へられるのであるが、この解決法によれば、又かの「そ」はサ行複合動詞の命令形であると考へねばならぬ。

次には「なーそ」を考へる。此處に「ね」は動詞の未然形に限つて後續する助詞であつて、それ以外には後續しないと言ふ事になつて居るが、かの希求の「がね」と共に「なーそ」は助詞に後續する唯二個の異例となるのである。このうち希求の「がね」は、奈良朝文法史の説によれば格助詞、終助詞の重用であるから、あるいはその中間に用言の省略成分を補ふ事が出來るのであり、又「が」を終助詞とする立場にあつては、「がね」は複合して單一の助詞を作ると思はれるから、何にしても厳密にはさして特例とすべきではない。唯殘る禁止格「なーそね」にあつてのみ、終助詞「そ」に終助詞の「ね」が重用されると言ふ著しい異例が出るのであり、しかもこの場合は共に終助詞であるために「ね」の上位に用言の省略成分は考へられず、さりとてこの二助詞の性質の相違性から考へて、決して「そね」を單一の複合助詞として扱ふ事は出來ないのである。この異例にも上述の立場は最も妥當な解決法を與へる。つまり「なーそ」の上位に用言の省略成分は考へられず、さりとてこの二助詞の性質の相違性から考へて、決して「そね」を單一の複合助詞として扱ふ事は出來ないのである。この異例にも「そーね」と分解する場合に、「なーそ」の「ーそ」がサ行變格の古形の命令形であるとすれば、又カ行變格活用と比較して「この事」「ーそ」と言ふその未然形が考へられ、「ね」はサ行變格動詞の古い未然形に後續した頃の固定殘存の例であ

るとして説き得られるのである。かくすれば、「なーそね」に對する在來の疑問も亦解決するであらう。

上二例は、更に古格のサ行變格活用に「ーそ」の命令形乃至は未然形のあつた事を物語る遺存語法であつた。それは、私は最後に、動詞活用の發達史上から見たサ行變格活用の位置に對して貧しい一つの推論を與へる事を以つて、いよいよこの項の考察を終る事としよう。カ・サ二變格活用の親近性は今までにも言はれた事であるが、その兩活用の語尾變化を比較する事によつて益々その可能性は強められる。即ち兩活用は、未然形及び命令形を除いてすべてその語尾を共通にし、しかも共にそれがナ行變格、上下二段の中間型の特殊活用である事までが全く一致するのである。しかして、更に兩活用のみに一致する承接上の特異性（例へば、回想の「し」を後續する時に未然形を以てする「か（他の動詞は準用形）」、「者」を除くこの兩活用のみが完了の「り」に結び得る「か言ふ如等」等を考へ合はせて、それが發生的に特殊的親近關係があつたのであらうと言ふ推定は當然になされて良いのである。そして、もしその推定がなされるならば、更に一步を進めて、カ行變格型の活用から後に現代のサ行變格形の

活用が分化したのであらうと言ふ想定が、その逆の場合の想定より遙に妥當であると言ふ事を一言觸れて見なければならぬ。動詞活用の發達やその沿革については、未だ確定的な考へを私が持つて居ると言ふのではないが、唯四段形乃至上一段系の大部のものが比較的古い發生にかかるものである事は考へ得る。私はそれを、餘程古く發生したらしい接辭類「り」「完」「す」「敬」「ゆ」「受」等（これはすべて奈良時代では周囲に入つてゐた語である）がその兩種のものに多く接合した姿で固定してきてゐる事を考へる。その大要は上表を見ていたたきたい。○印は所屬動詞のすべて又は大部分の接辭類を示す。△印は△印はその一部の接辭類を示す。×印は全く接続し得ない事を示す。このうち變格活用は接辭類が少ないので、その結果の重複出来ない。これは色々に考へられるとしても、尙四段

	四 段	○	○	○	上一段	△	△	○	上一段	△	△	○	サ 变	○	○	×	カ 变	○	×	×	ナ 变	×	×	×	ラ 变	×	○	○
リ	す	ゆ							リ	す	ゆ					リ	す	ゆ		リ	す	ゆ		リ	す	ゆ		
ス	ル	ル	ル	ル	ル	ル	ル	ル	ス	ル	ル	ル	ル	ル	ル	ス	ル	ル	ル	ス	ル	ル	ル	ス	ル	ル	ル	
タ	タ	タ	タ	タ	タ	タ	タ	タ	タ	タ	タ	タ	タ	タ	タ	タ	タ	タ	タ	タ	タ	タ	タ	タ	タ	タ	タ	
シ	シ	シ	シ	シ	シ	シ	シ	シ	シ	シ	シ	シ	シ	シ	シ	シ	シ	シ	シ	シ	シ	シ	シ	シ	シ	シ	シ	シ
ハ	ハ	ハ	ハ	ハ	ハ	ハ	ハ	ハ	ハ	ハ	ハ	ハ	ハ	ハ	ハ	ハ	ハ	ハ	ハ	ハ	ハ	ハ	ハ	ハ	ハ	ハ	ハ	ハ
カ	カ	カ	カ	カ	カ	カ	カ	カ	カ	カ	カ	カ	カ	カ	カ	カ	カ	カ	カ	カ	カ	カ	カ	カ	カ	カ	カ	カ
ミ	ミ	ミ	ミ	ミ	ミ	ミ	ミ	ミ	ミ	ミ	ミ	ミ	ミ	ミ	ミ	ミ	ミ	ミ	ミ	ミ	ミ	ミ	ミ	ミ	ミ	ミ	ミ	ミ
ル	ル	ル	ル	ル	ル	ル	ル	ル	ル	ル	ル	ル	ル	ル	ル	ル	ル	ル	ル	ル	ル	ル	ル	ル	ル	ル	ル	ル
ル	ル	ル	ル	ル	ル	ル	ル	ル	ル	ル	ル	ル	ル	ル	ル	ル	ル	ル	ル	ル	ル	ル	ル	ル	ル	ル	ル	ル

ものと、上一段系の無變形式のもの（それは必ず造語成分のル、レを取つて用言化するのである）、それを省いた原形部分は無變化な、讀音風な存在であったと考へられる。目一み、英一に、矢一等、「みべし」と「らむ」等の用法は、まだ上一説活用の造語成分を取らぬ無變化活用時代の遺法で、との交錯からその混用風な諸活用を生じたであらうとも考へられるのであり、従つて未然形のア列韻は、そのオ列、エ列韻のものに前行したものであるからその發達過程はアオエの徑路を通つたものと考へなければならぬ。（しかも此處に、未然形のオ列韻が混母音風な所謂乙類の音でもあつた事は注目しなければならないであらう）この點から考へても、カ行變格系の活用は、サ行變格風の活用に比して一段階以前の存在にかかるものであると考へるのが自然なのである。

かくて、現在のサ行變格活用は古くカ行變格風の活用であつたらしく、「一そ」はその古い命令形であり、未然形であつたのが、ある特定な言葉遣ひには固定して遠く文獻時代にまでその痕跡を残したのであつた。禁止格「な一そ」の「一そ」がそれであり、希求の助詞「こそ」の發生形は、またその古格の命令形に関するものであると言ふ事は長々と上に述べた通りである。

(註十三) 回想の「き」「し」が動詞の來・爲に對して特異な接續

法を取る事は、あるいは同音反覆を避ける他に諸源の兩語の關聯があるかも知れぬ。

(註十四) 動詞活用の發達については、後に發表する機會があらうと思ふ。此處では詳細をのべる餘裕がなかつた。

五

最後に私は重要な一つの問題を残して居る。それは語幹の「こ」についてであつた。第一頁で語幹と言ふ語を私は使つた。が、語動詞と考へた方がより正當である事が知られた。

私はそれを「來」と考へたい。その理由は、一つに用言に後續して、しかもそれ自身形式用言となり得る一音節のカ行動詞は「來」をおいて他にはないのであり、二つに前掲卷九の例歌に「來西尼」とあるのを、その證としうるからである。（註十五）此處に「來西尼」は、上述の「こそ」とは別に、「來」の使役形「來す」の連用形、あるいは「來西尼」は、上述の「こそ」は別に、「來」の使役形「來す」の連用形、からである。この語の用例の確實なものはない。ただ萬葉集十の「我智子乎莫越山」と同じ「吾智子乎平也許世山」は少し考へて見なければならぬ。このうち前者は存疑名考遣の方からも「來せ」を記されて、ある考によれば「來しむ」の意の「來す」を考へる一つの據所となるのであるが、尚これは敢諱として解ける所であり、一ただし「來す」と言ふ敬語の形の實例はない。一更に私の立場では、「來」が形式用言「ス」を取つた複合形の命令形として十分解けるのである。前著はいろいろ問題のある字面であつたが、要するに上からは「越」の意でつづく事は動かせないから、コの假名遣の方面か

らも「來す」こそ考へないのが程當である。(この意味ははつきりしない。越スナか越エシムナの意)しかし説けないが、越スナなら「越す」は四段活用で選用形に「こせ」ではなく、越スナとしても、他に下二段風な「越す」の例はないやうである。とにかく不明な語ではある。あるいは「舞衣者なら山」の如き類語的なかかり方かも知れない。

「來」には、ある意味で形式的用法と言つて良いやうな、「大

和には鳴きてか來らむ呼子鳥」の如き、又「將去毛天久留」
日本紀私記一大の如き用法があり、更に「沖べなる白玉依せ來
言海ニヨハ。」の如き、その事實の招來を示す形式用法もあるのであつた。

「依せ來ば復合動詞であるが、「來」が複合動詞である時には、國語の性質から「依せ來」は所謂自動詞である筈である。今それが他動詞であるのは、この複合動詞の觀念部は「依せ」で、「苦しくもふりあつて、「來」は形式用法に立つものこそ考へなければならぬ。」
「來る雨か」なども又それに近い用法であり、これらは全く力行變格の動詞に特有な形式的用法であつたと考へられるのである。以て、希求の「こそ」における形式用言「來」の發生も考へ得られるであらう。

(註十五)萬葉集卷十四に「麻績らををけにふすまに續ますと
もあすきせざめやいさせ小床に」があつて、「普通に來

せざラめや」と説かれるが、むしろ、「着せざラめや」と説く方が自然だと思ふし、尙「ざめや」は果してかく解くべきか否かにも疑問がある。ともかく「來す」と言ふ語の證據にはならぬ。

この小稿は昭和十一年度最後のある研究會の席上で發表したものに少し手を加へたのであるが、時日の切迫と多忙とのために十分な補正をなし得なかつた事は遺憾である。

尙、まだ未筆ながら、本稿を草するにあたつては、特に松岡靜雄氏著「日本言語學」中の所論からは多くの感銘を受けた事を此處に明記し、以て今は亡き氏の英靈の前に厚く謝する。

一一二・三・一〇一

(附記) 本稿では更にかの「行年」についても多少論じなければならぬと思つて居たが、これ以上多數の誌面を汚すに耐へないので、別の機會に譲る事とする。